

富 山（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は544kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「てんこもり」が増加傾向であることや、密植栽培（70株/3.3㎡）の定着による安定的な穂数確保により、1㎡当たり全もみ数が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「てんこもり」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	544	76.7	75.3	74.3	72.1	69.1
てんたかく	590	10.7	10.0	9.7	10.4	10.4
てんこもり	605	4.8	5.6	5.7	6.4	6.6
					→ +0.5/年	
富富富	544				1.4	2.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

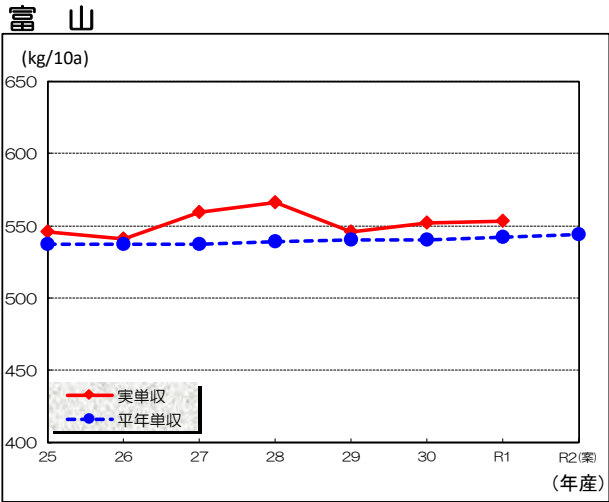
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

富山県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.5ポイント増加している。

（次ページ表2、表3、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



富 山	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	546	541	559	566	546	552	553	
7中5平均	551 (9)							
平年単収	537	537	537	539	540	540	542	544
前年差	0	0	0	2	1	0	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1 m ² 当 たり 株 数 (株)	18.7	19.1	19.2	19.1	19.2	18.9	△ 0.3	18.9	101.1	1.1
1 m ² 当 たり 有 効 穂 数 (本)	362.2	386	384	384	371	386	15.0	368	101.6	1.6
1 穂 当 たり も み 数 (粒)	77.2	75.9	77.1	74.2	77.4	75.9	△ 1.5	77.2	100.0	0.0
1 m ² 当 たり 全 も み 数 (百粒)	282	293	296	285	287	293	6.0	285	101.0	1.0
千 も み 当 たり 収 量 (g)	19.9	19.6	19.6	19.6	19.7	19.3	△ 0.4	19.8	99.5	△ 0.5
玄 米 千 粒 重 (g)	22.0	21.8	22.2	22.5	22.0	21.5	△ 0.5	22.1	100.5	0.5
10 a 当 たり 玄 米 重 (kg)	559	573	579	560	565	565	0.0	562	100.5	0.5
前 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.7	0.4	0.7	1.3	2.8	0.3	△ 2.5	1.0		0.3
後 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.6	△ 0.6	0.6	△ 0.4	0.7	1.3	0.6	0.3		△ 0.3

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

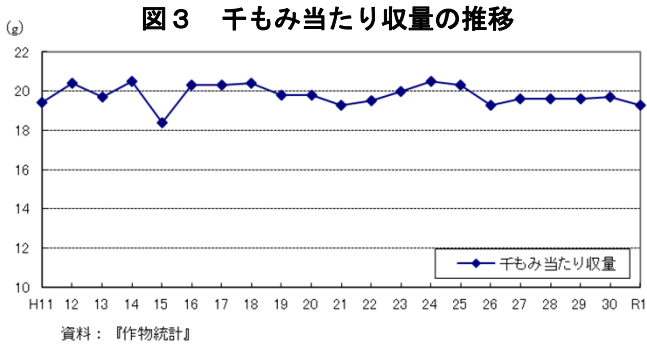
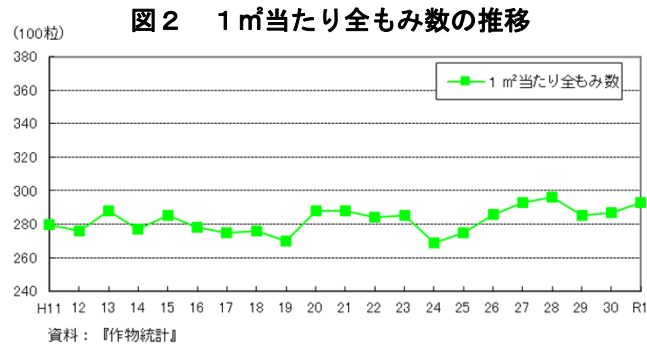


表3 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
25	—	○	102
26	○	×	101
27	○	—	103
28	◎	—	106
29	○	—	100
30	○	—	102
R1	○	×	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（富山は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 高温に打ち勝つ米づくりに向け、以下の指導が行われている。
- ・ 高温登熟の回避として適期移植の実施。
 - ・ 高温に打ち勝つ稲体づくりとして、適正穂数に向けた栽培密度（70株/3.3m²）の確保、適期・適切な中干しの徹底。
 - ・ 土壌診断に基づく土づくりの実施・基肥の適正な施用。

石 川（前回変動:平成29年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は523kg（対前年差+3kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「ひやくまん穀」が増加傾向であること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準
の高い「ひやくまん穀」が増加傾向に
あり、令和2年産も同様の傾向になる
ものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	516	72.3	68.8	69.3	64.4	60.8
ゆめみづほ	562	18.4	18.4	17.4	18.0	18.1
ほほほの穂	522	2.3	2.2	2.0	2.0	2.0
ひやくまん穀	600			1.1	2.5	4.2
						+3.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
加賀	545	56.8	57.7	57.7	57.9	58.2
能登	493	43.2	42.3	42.3	42.1	41.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

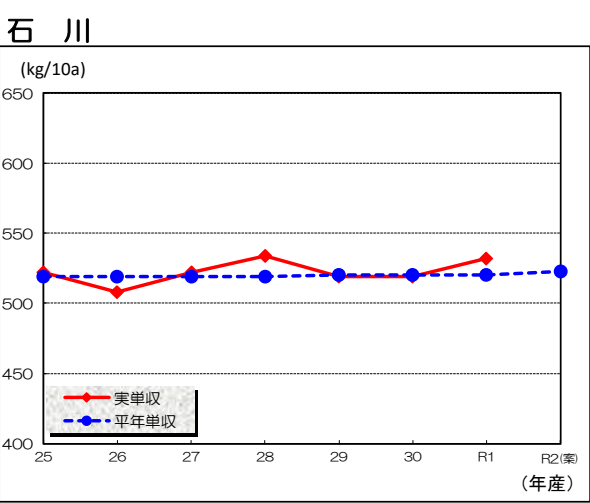
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

石川県における近年の10 a 当たり収
量については、平年収量を上回って推移
している。（図1）

収量構成要素については、平成16年か
ら26年の平均値と平成21年から令和元年
の平均値を比較すると、千もみ当たり
収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数
が0.5ポイント増加している結果、10 a
当たり玄米重は0.3ポイント増加してい
る。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



石 川	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	522	508	522	534	519	519	532	
7中5平均	523 (3)							
平年単収	519	519	519	519	520	520	520	523
前年差	0	0	0	0	1	0	0	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.1	17.2	17.5	17.4	17.9	17.8	△ 0.1	17.6	97.2	△ 2.8
1㎡当たり有効穂数（本）	389.4	394	389	389	392	398	6.0	389	99.8	△ 0.2
1穂当たりもみ数（粒）	73.5	73.4	74.3	73.5	74.5	73.6	△ 0.9	74.0	100.7	0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	287	289	289	286	292	293	1.0	289	100.5	0.5
千もみ当たり収量（g）	18.5	18.4	18.9	18.5	18.2	18.5	0.3	18.5	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	21.9	21.5	22.3	22.2	21.9	21.7	△ 0.2	21.9	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	532	532	545	529	530	542	12.0	534	100.3	0.3
前40日平均気温（℃）	0.6	0.3	0.6	1.3	2.4	0.3	△ 2.1	0.9		0.3
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.5	0.7	△ 0.2	1.1	1.1	0.1	0.3		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

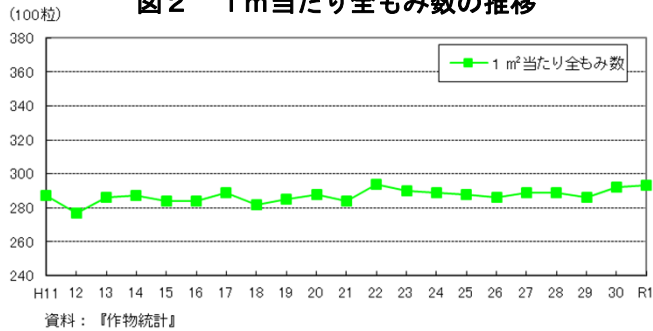


図3 千もみ当たり収量の推移

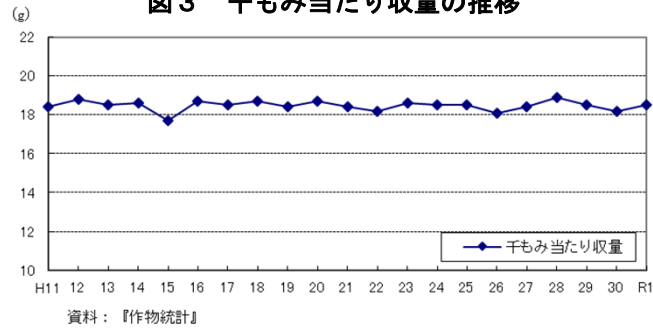


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終指 ）数
25	—	—	101
26	—	×	98
27	—	—	101
28	—	○	104
29	—	—	99
30	—	—	100
R1	○	—	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（石川は1.85mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。
- ・ 適正穂数（栽培密度）の確保
 - ・ 肥料の適期・適量施肥
 - ・ 適期収穫
 - ・ 土づくり等の推進

岐 阜（前回変動:平成17年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は486kg（対前年差－2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「ひとめぼれ」及び「あきたこまち」が減少傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、売れる米づくりと高品質安定生産の面から、「ハツシモ」、「コシヒカリ」は一定の作付が維持される一方、収量水準の高い「ひとめぼれ」及び「あきたこまち」が減少傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H18	28	29	30	R1
ハツシモ	459	36.4	35.7	36.5	42.4	38.0
コシヒカリ	499	29.9	31.8	31.5	30.3	32.8
ひとめぼれ	508	8.9	8.6	7.5	6.2	6.7
あきたこまち	502	8.2	6.8	6.3	4.9	4.7
						-5.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H18	28	29	30	R1
西南濃	467	55.1	53.9	53.6	54.6	54.7
中濃	489	18.4	19.2	19.3	19.1	18.7
東濃	513	14.5	14.6	14.6	14.2	14.3
飛騨	522	11.9	12.3	12.5	12.1	12.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

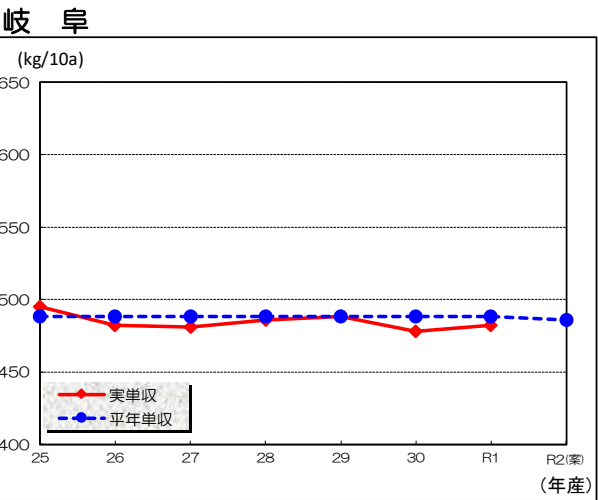
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

岐阜県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数が1.3ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.9ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準



岐 阜	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	495	482	481	486	488	478	482	
7中5平均	484 (-4)							
平年単収	488	488	488	488	488	488	488	486
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.7	16.1	16.1	15.9	15.7	15.7	0.0	16.3	97.6	△ 2.4
1㎡当たり有効穂数（本）	349.1	361	354	364	356	353	△ 3.0	358	102.6	2.6
1穂当たりもみ数（粒）	75.2	73.1	75.1	73.6	75.0	75.4	0.4	74.4	98.9	△ 1.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	263	264	266	268	267	266	△ 1.0	267	101.3	1.3
千もみ当たり収量（g）	18.6	18.6	18.6	18.6	18.3	18.5	0.2	18.6	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	22.7	22.8	22.8	22.8	22.5	22.4	△ 0.1	22.8	100.4	0.4
10a当たり玄米重（kg）	490	490	496	498	488	491	3.0	494	100.9	0.9
前40日平均気温（℃）	0.7	1.3	0.4	0.8	2.7	1.3	△ 1.5	0.8		0.1
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 1.0	1.0	△ 0.6	0.1	1.2	1.2	0.1		△ 0.4

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

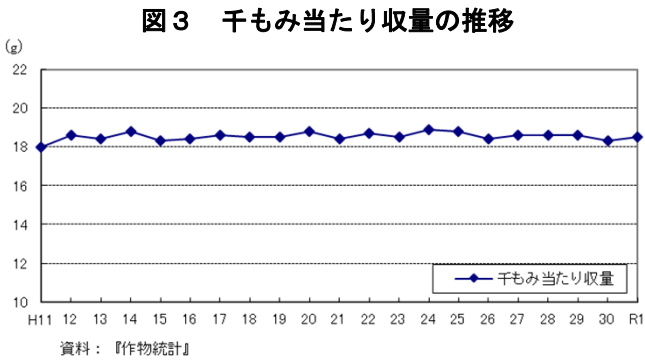
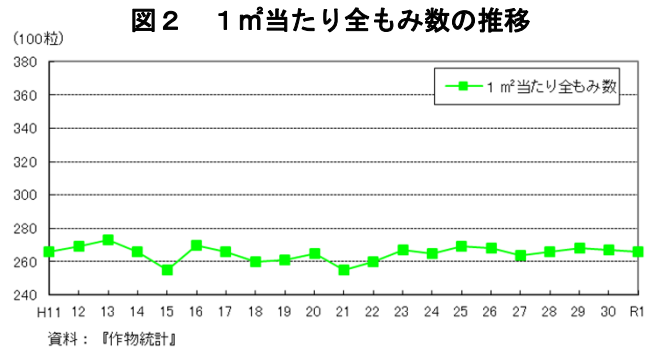


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
25	—	—	101
26	—	×	99
27	—	—	99
28	—	—	100
29	—	—	100
30	—	×	97
R1	—	—	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（岐阜は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

温暖化傾向に対応するため、以下の指導が行われている。

- ・ 疎植栽培の普及。
- ・ 緩効性肥料の導入。
- ・ 適正な肥培管理。
- ・ 適期収穫。

静岡県（前回変動：平成21年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は520kg（対前年差－1kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、収量水準
の高い「きぬむすめ」が増加傾向にあ
るものの、同様の割合で収量水準が高
い「あいちのかおり」が減少傾向にあ
り、令和2年産も同様の傾向になるも
のと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	503	44.7	43.0	43.6	44.7	45.0
あいちのかおり	539	16.8	15.3	15.0	13.6	13.4
きぬむすめ	544	9.4	12.6	13.6	14.3	14.3
キヌヒカリ	514	9.7	9.8	8.5	7.8	7.8
にこまる	540	5.1	5.7	6.1	6.2	6.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
東 部	510	47.9	48.1	48.2	47.7	47.5
西 部	519	52.1	51.9	51.8	52.3	52.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

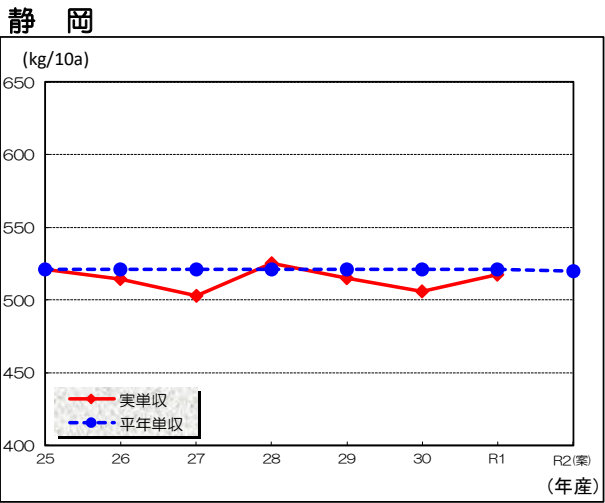
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

静岡県における近年の10a当たり収
量については、平年収量を下回って推移
している。（図1）

収量構成要素については、平成16年か
ら26年の平均値と平成21年から令和元年
の平均値を比較すると、千もみ当たり
収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数
が0.5ポイント増加している結果、10a
当たり玄米重は0.9ポイント増加してい
る。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



静岡県	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	521	514	503	525	515	506	517	
7中5平均	515 (-6)							
平年単収	521	521	521	521	521	521	521	520
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.4	17.7	17.6	17.4	17.2	16.9	△ 0.3	17.7	96.2	△ 3.8
1㎡当たり有効穂数（本）	367.7	369	364	387	358	367	9.0	371	101.0	1.0
1穂当たりもみ数（粒）	75.5	75.1	76.4	73.9	77.7	82.0	4.3	75.0	99.3	△ 0.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	277	277	278	286	278	301	23.0	278	100.5	0.5
千もみ当たり収量（g）	18.9	18.6	19.4	18.5	18.6	17.6	△ 1.0	18.9	100.0	0.0
玄米千粒重（g）	22.2	22.0	22.1	22.3	22.0	21.2	△ 0.8	22.1	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	524	516	538	529	518	530	12.0	529	100.9	0.9
前40日平均気温（℃）	0.5	0.4	0.1	1.2	2.4	0.0	△ 2.3	0.6		0.1
後40日平均気温（℃）	0.6	△ 0.5	0.8	0.3	0.7	1.5	0.8	0.6		0.0

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

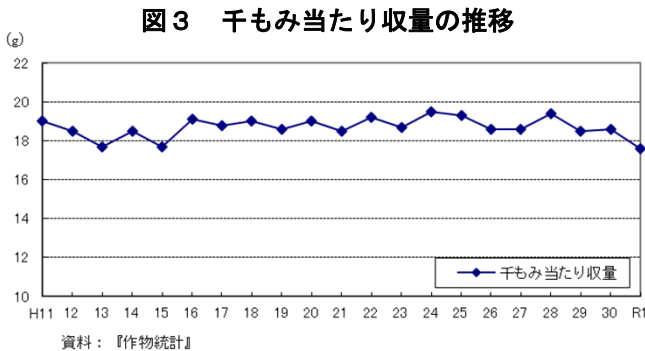
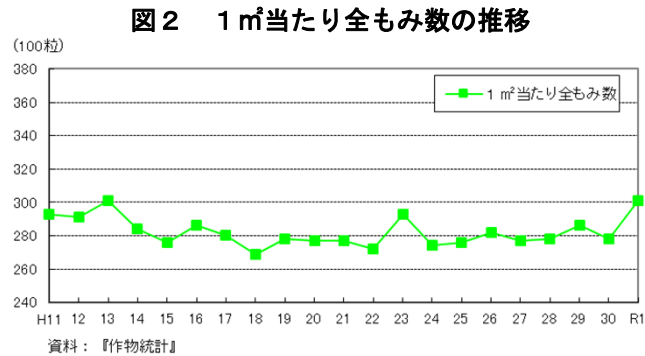


表4 最近の作柄（平成25年度以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終 指 数）
25	—	○	100
26	—	×	99
27	—	×	96
28	—	○	101
29	○	×	99
30	—	×	97
R1	◎	※	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年度以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大き
いものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅（静岡は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 売れる米づくり及び省力・低コストのため、以下の指導が行われている。
- ・ 健苗育成、追肥（穂肥）の適量・適期の徹底。
 - ・ 適期防除・適期刈取り。
 - ・ 基肥一発肥料（側条施肥）導入や疎植栽培の拡大による育苗箱数削減。

広島（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は528kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「あきさかり」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「あきさかり」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	509	44.3	44.5	43.8	44.2	43.5
あきさかり	593	4.6	5.1	6.2	9.3	11.4
					↗ +2.1/年	
ヒノヒカリ	512	19.9	18.5	14.5	12.5	12.2
あきろまん	544	9.6	8.7	8.1	7.9	7.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合(%)				
		H27	28	29	30	R1
南部	520	41.5	41.2	40.7	40.5	39.8
北部	517	58.5	58.8	59.3	59.5	60.2

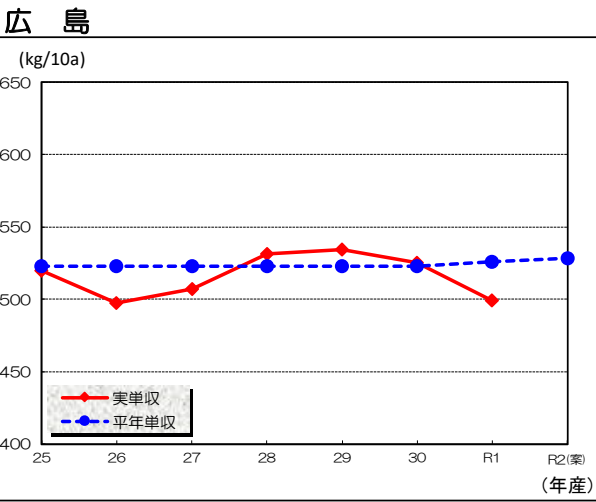
資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

広島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数に増減はなく、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は0.3ポイント減少している。
（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



広島	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	520	497	507	531	534	525	499	
7中5平均	516 (-10)							
平年単収	523	523	523	523	523	523	526	528
前年差	0	0	0	0	0	0	3	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	16.7	15.7	16.0	15.9	15.5	15.4	△ 0.1	16.0	95.8	△ 4.2
1㎡当たり有効穂数（本）	370	372	342	381	353	379	26.0	366	98.8	△ 1.2
1穂当たりもみ数（粒）	77.8	75.5	83.3	74.5	79.9	75.2	△ 4.7	78.3	100.6	0.6
1㎡当たり全もみ数（百粒）	286	281	285	284	282	285	3.0	287	100.0	0.0
千もみ当たり収量（g）	18.9	18.5	19.2	19.2	19.3	17.9	△ 1.4	18.7	98.9	△ 1.1
玄米千粒重（g）	21.8	21.8	21.9	22.5	22.0	21.4	△ 0.6	21.9	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	538	521	547	546	545	511	△ 34.0	536	99.7	△ 0.3
前40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.0	0.7	1.3	2.0	0.1	△ 1.8	0.6		0.1
後40日平均気温（℃）	0.8	△ 1.7	0.7	△ 0.0	0.6	1.0	0.5	0.2		△ 0.6

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移

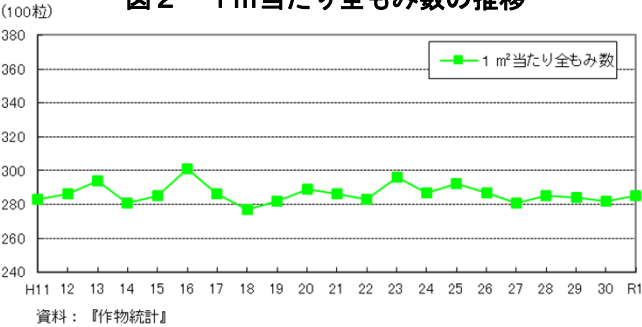


図3 千もみ当たり収量の推移

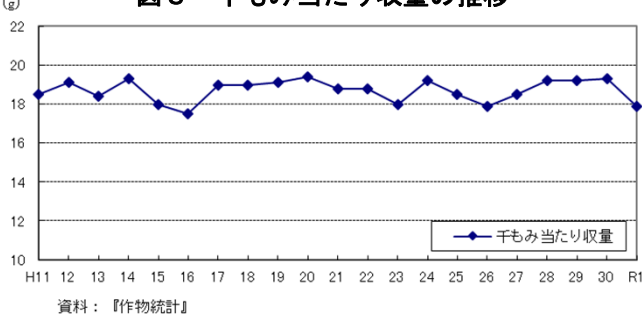


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最 況終指 ）数
25	○	×	99
26	—	×	95
27	×	—	96
28	—	○	102
29	—	○	102
30	×	○	101
R1	—	※	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大き
いものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅（広島は1.80mm）以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

- 需要に応じた生産に向け、以下の指導を行っている。
- ・ 良好な管理が行われているほ場の作付の維持・拡大。
 - ・ 低コスト化技術（密播疎植栽培、直播栽培等省力栽培）の導入。
 - ・ コシヒカリと比較して収量性の高い（多収で品質の良い）品種を導入して経営改善。

高 知（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は456kg（対前年差－2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等
によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、収量水準
の高い「よさ恋美人」が増加傾向にあ
るものの、「南国そだち」は減少傾向
にあり、令和2年産も同様の傾向にな
るものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
コシヒカリ	471	51.5	51.2	51.6	51.5	52.8
ヒノヒカリ	421	29.1	29.1	29.4	29.2	28.1
にこまる	445	4.1	4.5	4.9	5.5	5.5
よさ恋美人	514				0.5	1.4
南国そだち	481	1.1	0.9	0.9	0.7	0.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、
大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
中東部	467	58.9	60.0	60.0	60.0	59.7
西部	418	41.1	40.0	40.0	40.0	40.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

なお、特に県西部において高齢化等
により生産組織へ委託する農家が増加
傾向にあり、受託面積割合が高くなっ
ている。

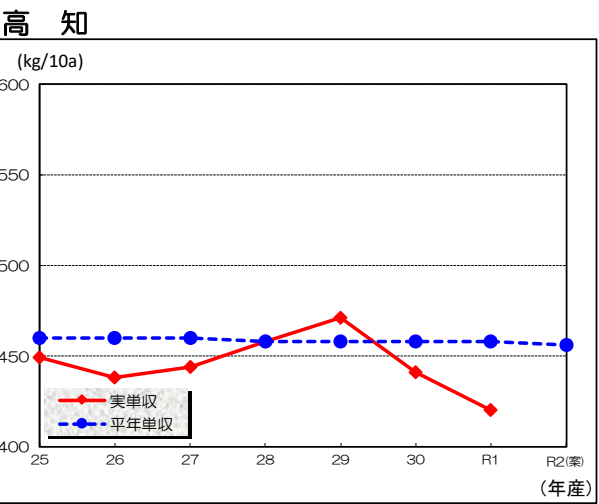
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

高知県における近年の10 a 当たり収量
については、平年収量下回って推移して
いる。（図1）

収量構成要素については、平成16年か
ら26年の平均値と平成21年から令和元年
の平均値を比較すると、千もみ当たり
収量が1.1ポイント増加しているものの、
1㎡当たり全もみ数が3.2ポイント減少
している結果、10 a 当たり玄米重は1.8
ポイント減少している。

（次ページ表3、表4、図2及び図3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



注：グラフの目盛りの最高収量を600kgとしている。

高 知	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	449	438	444	458	471	441	420	
7中5平均	446 (-12)							
平年単収	460	460	460	458	458	458	458	456
前年差	0	0	0	-2	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

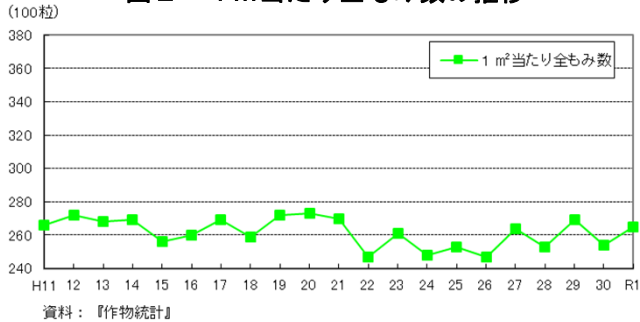
	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	15.4	14.7	14.5	14.5	14.5	14.5	0.0	14.7	95.5	△ 4.5
1㎡当たり有効穂数（本）	371.7	351	343	381	348	360	12.0	351	94.5	△ 5.5
1穂当たりもみ数（粒）	70.4	75.2	73.8	70.6	73.0	73.6	0.6	72.3	102.7	2.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	263	264	253	269	254	265	11.0	255	96.8	△ 3.2
千もみ当たり収量（g）	18.1	17.5	18.7	17.9	17.9	16.2	△ 1.7	18.3	101.1	1.1
玄米千粒重（g）	21.3	21.1	21.5	21.0	21.2	20.8	△ 0.4	21.2	99.5	△ 0.5
10a当たり玄米重（kg）	472	461	474	481	454	430	△ 24.0	464	98.2	△ 1.8
前40日平均気温（℃）	0.3	△ 0.1	0.7	0.5	0.7	0.2	△ 0.5	0.3		0.0
後40日平均気温（℃）	0.5	△ 0.6	0.7	0.7	0.7	0.0	△ 0.6	0.3		△ 0.2

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

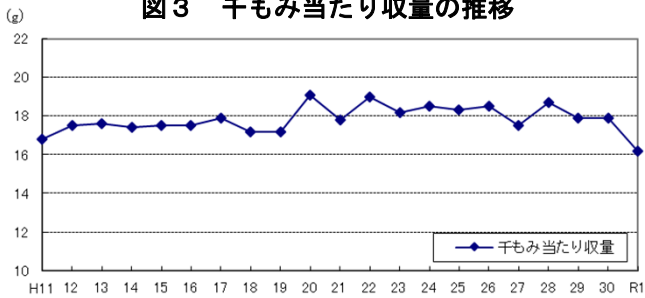
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数の推移



資料：『作物統計』

図3 千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数		登熟		（作況最終指数）
	早期	普通	早期	普通	
25	※	○	○	※	98
26	×	※	○	×	95
27	—	◎	×	※	96
28	×	×	○	○	100
29	◎	—	×	—	103
30	×	×	×	×	96
R1	◎	×	※	※	91

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目割の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（高知は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

品質向上に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適正な肥培管理、水管理、適期防除、適期刈取。
- ・ 高温障害対策として、早期栽培では収穫前の水管理の徹底、普通期栽培では適期移植（移植時期を遅らせる）。

大 分（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和 2 年産水稻の10a当たり平年収量は499kg（対前年差－ 3 kg）となった。
これは、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、品種構成に大きな変化はみられない。（表 1）
なお、ヒノヒカリは、登熟中の高温による品質低下が他の品種に比べ著しいが、消費者の人気の高いこと等から、大きく変動する状況ではないとの情報がある。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
ヒノヒカリ	499	74.7	74.6	75.7	73.9	73.9
ひとめぼれ	493	11.0	10.8	11.0	11.0	11.0
コシヒカリ	494	3.7	3.6	3.7	3.8	3.8
にこまる	521	4.2	3.5	2.9	3.4	3.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

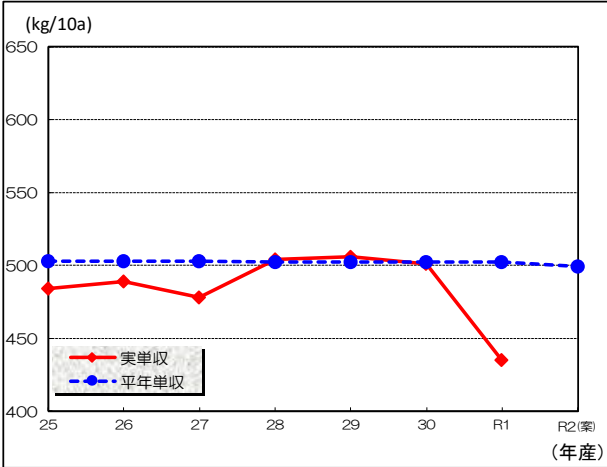
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		H27	28	29	30	R1
北部	507	28.9	29.1	29.3	29.1	29.2
湾岸	488	29.2	29.1	28.9	29.2	29.3
南部	484	29.4	29.3	29.4	29.2	29.0
日田	475	12.5	12.5	12.4	12.5	12.5

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近 7 か年のうち最高及び最低を除いた 5 か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

大分県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図 1）
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、1 m²当たり全もみ数が0.1ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が2.3ポイント減少している結果、10 a 当たり玄米重は1.5ポイント減少している。
（次ページ表 3、表 4、図 2 及び図 3）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準
大 分



大 分	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	484	489	478	504	506	501	435	
7中5平均	491 (-11)							
平年単収	503	503	503	502	502	502	502	499
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1 m ² 当 たり 株 数 (株)	16.2	15.5	15.3	15.2	14.8	15.0	0.2	15.6	96.3	△ 3.7
1 m ² 当 たり 有 効 穂 数 (本)	357.3	348	367	368	376	335	△ 41.0	359	100.6	0.6
1 穂 当 たり も み 数 (粒)	80.9	82.5	80.4	81.5	80.9	83.3	2.4	81.0	100.1	0.1
1 m ² 当 たり 全 も み 数 (百粒)	291	287	295	300	304	279	△ 25.0	292	100.1	0.1
千 も み 当 たり 収 量 (g)	17.5	16.9	17.4	17.3	16.7	16.0	△ 0.7	17.1	97.7	△ 2.3
玄 米 千 粒 重 (g)	21.2	21.4	20.9	21.4	21.0	20.4	△ 0.6	21.2	100.0	0.0
10 a 当 たり 玄 米 重 (kg)	509	486	514	519	509	447	△ 62.0	502	98.5	△ 1.5
前 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.5	0.0	1.1	1.2	1.3	0.2	△ 1.1	0.6		0.1
後 40 日 平 均 気 温 (℃)	0.5	△ 1.3	1.0	△ 0.2	0.3	1.5	1.2	0.0		△ 0.5

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

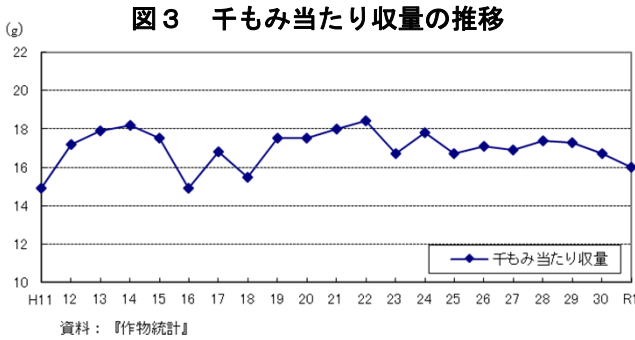
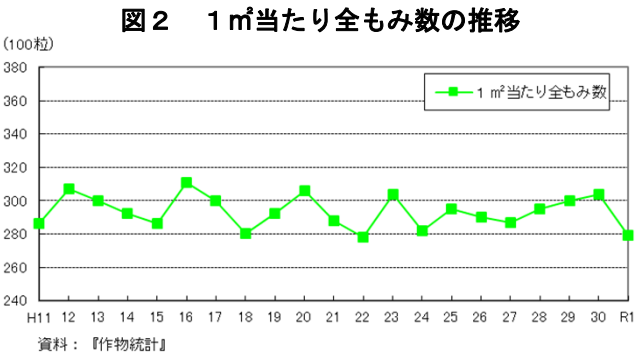


表4 最近の作柄(平成25年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最 況終 指 数)
25	—	※	96
26	—	×	97
27	×	×	95
28	—	—	100
29	○	×	101
30	○	×	100
R1	※	※	85

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が
使用しているふるい目幅の分布において、大き
いものから数えて9割を占めるまでのふるい目
幅(大分は1.80mm)以上に選別された玄米を基
に算出した数値である。

(参考) 栽培技術等の動向

高品質、良食味米生産を基本とし、効率的な生産体制の整備による低コスト生産を推進するため、以下の指導が行われている。

- ・ 担い手への農地集積。
- ・ 乾田直播等の新技術や多収品種の導入による生産コスト削減。
- ・ 夏期高温によりヒノヒカリの品質低下が問題となっている地域における移植時期の適正化等。

鹿 児 島（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和2年産水稻の10a当たり平年収量は484kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い「なつほのか」及び「あきほなみ」が増加傾向であること等によるものと考えられる。

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
ヒノヒカリ	485	64.0	64.2	64.5	62.5	61.4
コシヒカリ	447	16.7	16.2	16.0	15.4	14.4
あきほなみ	514	6.6	6.9	7.3	7.4	7.6
なつほのか	514					2.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「なつほのか」及び「あきほなみ」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。
(表1)

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。(表2)

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

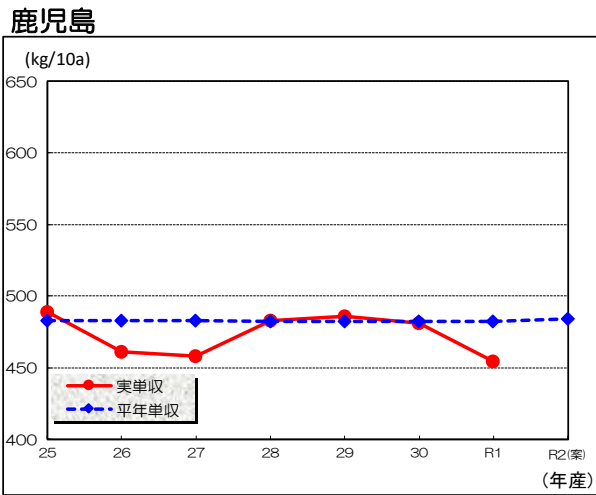
地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H27	28	29	30	R1
高収量地域	495	53.1	53.3	53.4	52.4	54.3
中収量地域	461	42.5	42.6	42.5	43.4	41.6
低収量地域	414	4.4	4.1	4.1	4.2	4.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 高収量地域：出水薩摩地帯・伊佐始良地帯、中収量地域：薩摩半島地帯・大隅半島地帯、低収量地域：熊本大島地帯

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

鹿児島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。(図1)
収量構成要素については、平成16年から26年の平均値と平成21年から令和元年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.1ポイント増加しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は2.3ポイント減少している。
(次ページ表3、表4、図2及び図3)

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



鹿児島	25	26	27	28	29	30	R1	R2(案)
実単収	489	461	458	483	486	481	454	
7中5平均	474 (-8)							
平年単収	483	483	483	482	482	482	482	484
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

	16～26年 平均値 ①	平成27年	28	29	30	令和元年	対前年差	21～元年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント 差
1㎡当たり株数（株）	18.0	17.5	17.4	17.5	17.6	17.4	△ 0.2	17.7	98.3	△ 1.7
1㎡当たり有効穂数（本）	395.6	351	382	395	380	355	△ 25.0	382	96.5	△ 3.5
1穂当たりもみ数（粒）	71.7	75.8	75.1	72.4	72.6	74.4	1.8	73.2	102.1	2.1
1㎡当たり全もみ数（百粒）	285	266	287	286	276	264	△ 12.0	278	97.4	△ 2.6
千もみ当たり収量（g）	17.4	17.8	17.3	17.5	17.9	17.6	△ 0.3	17.6	101.1	1.1
玄米千粒重（g）	21.3	21.6	21.0	21.2	21.4	21.1	△ 0.3	21.4	100.5	0.5
10a当たり玄米重（kg）	500	474	496	500	493	465	△ 28.0	489	97.7	△ 2.3
前40日平均気温（℃）	0.3	△ 0.3	0.8	0.7	0.7	0.3	△ 0.4	0.2		△ 0.1
後40日平均気温（℃）	0.4	△ 1.1	1.0	0.4	0.3	1.1	0.8	0.1		△ 0.3

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)
注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。
注：2 16～26年平均値及び21～元年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

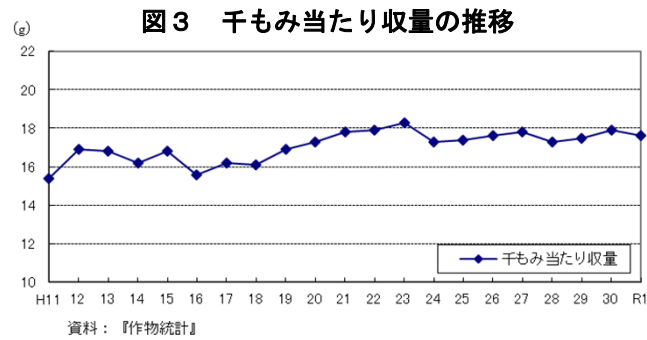
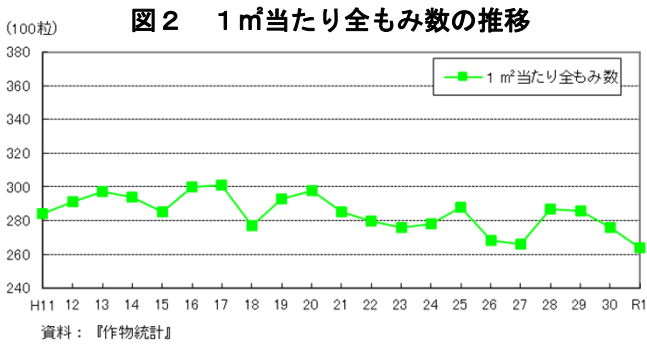


表4 最近の作柄（平成25年産以降）

年次	全もみ数		登熟		（作況最終指数）
	早期	普通	早期	普通	
25	×	—	◎	—	101
26	—	※	○	○	95
27	※	×	※	○	95
28	—	○	×	×	100
29	◎	—	○	×	100
30	○	×	—	—	100
R1	—	※	×	—	94

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）
なお、平成27年産以降の作況指数は農家等が使用しているふるい目幅の分布において、大きいものから数えて9割を占めるまでのふるい目幅（鹿児島は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した数値である。

（参考）栽培技術等の動向

良品質米の生産に向け、以下の指導が行われている。

- 健全な土づくり。
- 適期植付・防除・収穫。
- 適正な栽植密度・施肥・水管理。